不易と流行の説

土田龍太郎

一.

およそ風雅の道の奥に入らむとほりするともがら、かの芭蕉庵桃青翁の唱へし不易と流行の説せめて一たびだに考へではあるべからぬは今さらいはでもありなむ。先人のいまだ思ひよらざりけむこの不易と流行のことを芭蕉翁のはじめて説きしは奥の細道に行脚ありし元祿二年の冬のころなること去來抄に記せり。されば不易流行説、その初めを尋ぬるに、これまこと芭蕉翁の口より出でしにまぎれなけれど、この翁おのが俳諧の奥旨をみづから筆をとりてつばらに教ふることかつてなかりしかば、今不易流行の眞義を知らむとせば、門人の書き留めたる師説のここかしこより不易と流行の文字を摭(ひろ)ひつつ比べ勘ふるほかすべなきににたり。

二.

まづ引きみるべきは去來抄の右の一節なり。

去來曰く蕉門に千載不易の句一時流行の句と云ふ有り。是を二つに分けて教へ玉へる、其元は一つ也。不易を知らざれば基(もとゐ)たちがたく、流行を知らざれば風新たならず。不易は古によろしく後に叶ふ句成る故千載不易といふ。流行は一時〳〵の變にして昨日の風今日宜しからず、今日の風明日に用ひがたき故一時流行とはいふ。はやる事をいふ也。

世の俳諧時とともに移りゆくなれば、昨日と今日と風同じからでおのづからはやりすたりの出で來るをばここに流行と呼び、これにかはりて古に宜しく後にもかなふ句、すなはち昔今(むかしいま)のへだてなく世人のめでてやまぬを不易といへるがごとし。

去來おのがはらからなる魯町の問ふにまかせて、一時の物數寄なきゆゑに古今に叶へる不易の句とて

月を柄(え)にさしたらば能(よき)うちは哉　宗鑑
是は〳〵とばかり花のよしの山　貞德
初風や伊勢の墓原猶すごし　芭蕉

の三句をあげ、一時流行したれどそれぞれの物數寄のあれば今はとりあぐる人もなきものとては

むすやうに夏にこしきの暑さかな
あれは松にてこそ候へ杉の雪　松下
海老超えて野老(ところ)痩せたるも友ならん　常矩

の三句を列ねたり。

去來のあげし例句はたして先師の思へる不易流行にさながらかなへりやいなやいぶかしきかたなきにしもあらず。ただおもしろきばかりにて風雅のまことにねざせりとは思ひがたけれど、そはともかくもあれ、これにて先師の唱へし不易流行を去來の如何に辨へたりや、おほかた知るを得べし。

これにつきていささか心とめであるまじきは、猿蓑の成れるに先立ち去來のものせる

をととひはあの山こえつ花盛り

てふ一句にてぞある。これを聞くからに芭蕉翁いかにしてかねて知りたりけむ、この句今聞く人あるまじ、一兩年を待つべしと定め云ひたれど、はたしてその洞見のごとくなりにけること去來抄の先師評といへるところにつばらに記せり。されば流行といふこと、詩人歌人連歌師にとりてこそさしもあるまじけれ、俳諧者のためにはゆゆしき大事とはなれるなり。

土芳その白册子にて

詩歌連俳はともに風雅也。上三のものには餘す所も、その餘の處迄俳はいたらずといふ所なし。

と記せれど、これ許六が韻塞にて、西行宗祇の見殘しは皆俳諧の懷(うち)なりと云へるとおもむきひとしかるべし。すなはち俳諧はなべての詩歌の及びがたき鄙事俗情(ひじぞくじやう)にもわたりて餘すところなければ、俗事のいとも移りやすきにしたがひて俳諧もまたはやりすたりのことにすみやかなることげにさりがたきわざともや云ふべけむかし。

三.

土芳その赤册子の初めにて不易流行を述ぶることいともこまやかなれど、これゆめゆるがせに見るまじければ長きをもいとはで左にさながら引きみるべし。

師の風雅に萬代不易有り。一時の變化あり。この二つに究まり、其本(そのもと)一つ也。その一といふは風雅の誠也。不易を知らざれば實に知れるにあらず。不易といふは新古によらず變化流行にもかかはらず誠によく立ちたる姿也、云々。

また千變萬化する物は自然の理也。變化にうつらざれば風あらたまらず、是に抑うつらずと云ふは、一時の流行に口質(くちぐせ)を得たるばかりにて、その誠を責めざるゆゑ也。せめず心をこらさざる者、誠の變化をしるといふ事なし。ただ人にあやかりてゆくのみ也。せむるものはその地に足をするゑがたく一歩自然に進む理(ことわり)也。行く末いく千變萬化する共、誠(まこと)の變化はみな師の俳諧也。

かりにも古人の涎をなむる事なかれ。四時の抑うつるごとく物あらたまる皆かくのごとし共いへり云々。

ここにて土芳代々變化あるを流行とし今見るところ昔に替らざるを不易とせるににたれ

ば、土芳の説と先にけみせし去來の説とただうち見るほどはかたみにさしも距らずやにおぼゆらむかし。さはれここにて土芳の誠の一字もてくりかへし云へるはいかなる意(こころ)なるらむ、とみには測りがたけれど、四時交替を起さしむる乾坤造化のくすしきことわりをさせりとせばおほかた誤たざるべし。

同じ赤冊子の内にてまたさまざまの師説を述べりし後に

新しみは俳諧の花也云々　せめて流行せざれば新しみなし。新しみはつねに責むるがゆゑに一歩自然にすすむ地より顯はるる也。

と記せれば、土芳の流行をことに重くせしこと疑ひなし。ついで不易と新しみの例とておのおのにつきて一句をあげて後、さらに師の風雅の奥處(おくが)を示さむとて乾坤の變に言ひ及ぶこと左のごとし。

師のいはく、乾坤の變は風雅の種といへり。しづかに成る物は不變のすがた也。動ける物は變(へん)なり。時として留(と)めざればとどまらず。止むるといふは見とめ聞きとむる也。飛花落葉の散りみだるるもの、その中にして見とめ聞きとめざればをさまるとその活きたる物だに消えて跡なし。また句作りに師の詞(ことば)有り。物の見えたる光いまだ消えざる中にいひとむべし云々。

かく云へるごとく千變萬化してやまぬ乾坤の刹那の實相を見とめ聞きとむるや、間髪を入れずたちどころに句に云ひ出づるが俳諧なりとせば、俳諧者ただに乾坤の諸相を寫すのみにてやまず、乾坤の存立開顯にすら與れるものにてその功(いさを)しの重きこと譬へむにものなきなり。乾坤の刹那に變りゆくごとに俳諧また新になりゆかではあるべからず、この新しみ流行をまちて出で來るなれば、まことの俳諧に缺くまじきはまさにこの流行にほかなきなり。

芭蕉翁笈の小文の序にて

しかも風雅におけるもの、造化に隨ひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。思ふ所月にあらずといふ事なし云々。

と說きてさらに、

造化に隨ひ造化に歸れとなり

と云ひとぢめたり。これ土芳の右のごとく記しおける師說とおもむき同じくて、ここに造化といふは乾坤の四時にわたる遷移にほかならず。轉變してやまぬこの乾坤の實相を見とめ聞きとむるが風雅なりとせば、造化の神羅萬象いづれ俳諧ならざるはなく、またこの乾坤刹那も同じからねば、いかさま流行を離れては風雅の成り立ちがたきぞことわりなる。この流行といふもまた誠によらではあるべからねど、この誠をただに著せるを不易と云へるにて

もやあるらむかし。

四.

芭蕉門人の不易流行に言ひ及べる例、少からねば、ここにただ向井去來と服部土芳の記し遺せる師說ばかりけみしてやみなむはいささかほいなけれど、しばらくはこれにてかつがつことたらひぬべし。

去來は俳諧の時にはやり時にすたるをもて流行と思へるごとくなれど、土芳は乾坤の變轉のつねなきに因みて師の唱へし不易流行を論へり。時にとりての發句のはやりすたりのみを思ひてやみぬる去來の釋きざまいまだ淺きところありて土芳の心深きにはいかいも及びがたければ、不易流行說にかぎりていへば、土芳去來に勝れりと定めむともあながち依怙の沙汰にはあらじかし。

不易流行說を南宋性理學の理氣二元論によせて考へむとする物識人なきにあらねど、かかる解きざま芭蕉翁の本旨にかなへりとはえしもおもほえず。不易流行のおもむきにやや似よれりとおぼゆるは、かの道可道非常道てふ句とて始まる老子道德經の首章にてぞある。ここに常道と云へるはすなはち恆道(こうだう)にて、定まることなくたえず變りてやまざるを非常道といへるなれば、これげに俳諧の流行に擬(なぞら)へつべし。

（令和八年五月二十八日受附）